



写真-1 新川運河に架かる大輪田橋を撮影（令和5年1月）

■ 新川運河に架かる充腹構造の RC3 連アーチ橋～大輪田橋

写真-1 は、一般県道 489 号・兵庫埠頭線が新川運河（明治 9（1876）年 5 月竣工）を渡る箇所に架けられた大輪田橋で、大正 13（1924）年 6 月に竣工しています。充腹構造の鉄筋コンクリート 3 連アーチ橋で、橋長 56.6m、最長スパンは 17.6m、幅員は 20m（市電が走っていたため広幅員）です。胸壁面（側面）には開腹アーチを思わせる中間支柱様の石材が並び、その間を切石布積みで埋めていて、橋脚の水平断面は小判形を呈し、親柱や高欄には丁寧な装飾が施されています。橋名は、12 世紀後半、平清盛によって大修築された大輪田泊（おほわたのとり）に由来します。

昭和 20（1945）年 3 月 17 日の神戸大空襲や平成 7（1995）年 1 月 17 日の兵庫県南部地震により親柱等が損傷するなど多少の被害はありましたが橋梁本体に異常はなく、今も立派にライフラインとしての機能を発揮しています。



写真-2 大輪田橋北西側の親柱（「おほわたはし」と刻まれている）



写真-3 大輪田橋南西側の親柱（側面には「大正十三年六月竣工」とある）

■ 設計者の遊び心か、カタツムリ

右の写真-4・5は、大輪田橋の親柱を這う青銅製のカタツムリで、この親柱を含め3基の親柱に6匹、薬仙寺のモニュメントに1匹、計7匹のカタツムリが張り付いています。

ついでにいうと、右の写真のカタツムリが張り付いているコンクリート面の傷跡は、戦時中の金属類供出の痕と思われる。

筆者はカタツムリを見てルネッサンス時代の絵に描かれた「ハエ」の話を思い出しました。当時の画家たちは、自らの芸術的技量を競い合うように複雑なものや細かいものなど描写が難しいものを好んで描き、なかでも最も好んで描かれたのが「ハエ」だそうです。ハエの描写は技量を示すだけではなく、死や悪魔を連想させる不吉なものの象徴であり、特にキリストの受難を表現するためにキリストと一緒に描かれることもあったそうです。



写真-4 親柱にはカタツムリが3匹



写真-5 青銅製のカタツムリ

あの有名な『モナ・リザ』の来歴なども書いているジョルジョ・ヴァザーリの『画家・彫刻家・建築家列伝』には、ルネッサンス時代を代表する画家・チマーブエの外出中に、弟子のジョットがチマーブエの作品にハエの絵を書き足し、帰ってきたチマーブエが本物と思って何度も追い払おうとしたという逸話が紹介されています。

ということで、親柱に張り付いたカタツムリもてっきり橋の設計者の遊び心と思っていたら、全然違っていました。

青銅製のカタツムリは、「大輪田橋 戦災・震災復旧モニュメント」や薬仙寺の「戦災・震災モニュメント」への道しるべとして制作されたものだそうです。

つまり、カタツムリは橋の建造時に張り付けられたものではなく、震災後のモニュメント制作時に張り付けられたものでした。

制作者は、モニュメントデザインの設計・監修をした京都精華大学教授・小林陸一郎氏で、薬仙寺の戦災・震災モニュメント横の説明板には、小林陸一郎（りくいちろう）氏の想いが下記のように記されています。



写真-6 親柱の台座に描かれた「雷紋」とその上のカタツムリ

戦災・震災モニュメント
大輪田橋は神戸の誇る名橋として全国的に知られている。昭和二十年三月十七日の大空襲では、この橋近くに避難した五百名を超すともいわれる市民が犠牲となり、橋も炎で真黒に焼け焦げた。それから丁度半世紀、平成七年一月十七日の震災も大被害を受け親柱などの石材が大崩落した。修復にあたり旧石材破棄するに忍びず、ここにその一部をモニュメントとして保存した。大空襲、大震災の惨禍を後世に伝え、また犠牲者に鎮魂のまことをささげるものです。
デザイン設計監修
京都精華大学
小林陸一郎教授（彫刻家）

また、親柱台座の頂部には、ラーメン鉢の縁を飾っている「雷紋（らいもん）」の文様が描かれています（写真-6）。

雷紋は、中国では3千年以上の昔から青銅器、陶器、漆器、金工、木彫、建築などに用いられていて、稲妻紋ともいい、組み合わせたり重ねたり、電光を中に挟んだりして用いられることもあります。万物を潤す雷雨を表す文様ということから、豊作、吉祥の象徴と考えられているそうです。

■ 昭和 20 年 3 月の神戸大空襲では多くの方が犠牲に

大輪田橋東の袂下の通路は現在ブロックで塞がれています(写真-7)が、当時橋の下を南北に通り返ける通路がありました。昭和 20(1945)年、そこに空襲を避けて多くの人々が避難していました。3月17日の神戸大空襲で、油脂焼夷弾の炎が運河の水面を走り、火炎旋風が吸い込まれるように通路を通り返け、一瞬にして 50 人もの命を奪い去りました。近くに三菱造船所や川崎重工業の工場があったので狙われたものと思われます。

通路跡の近くには、昭和 22(1947)年9月出在家町協議会によって「戦災殉難者慰霊碑」が建てられ(平成8(1996)年10月再建)、慰霊碑背後の説明板には以下のような慰霊碑来歴が記されています。(令和5(2023)年1月に訪れると、平成26(2014)年に来た時に比べ、写真-7・8のようにすいぶんきれいに整備されていました)

戦災殉難者慰霊碑来歴 大東亜戦争末期昭和 20 年 3 月 17 日アメリカ合衆国 B29 爆撃機の神戸大空襲に遇った此の地、大輪田橋下暗渠内で多数の方々が被爆死されました。あの悲惨な状態、猛火のもと恐怖と悔しさの地獄図は日本人として未来永劫、忘れる事はないでしょう。生き残った町住者が、尊い生命を失われた人々に深く心からご冥福をお祈りすると共にこの悲運を永く後世に伝える為、出在家町協議会の手で此の地に慰霊碑を建立しました。協議会は恒例行事として、ご命日には町住者による慰霊祭を施行しております。殉難死された方々の安らげき事を只管(ひたすら)祈り続けん。



写真-7 橋下通路跡

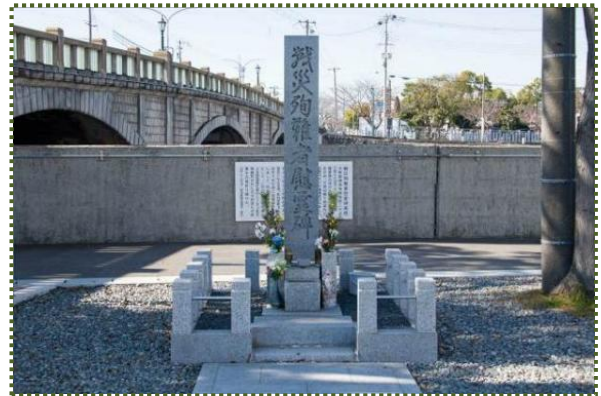


写真-8 戦災殉難者慰霊碑

■ 重厚なデザインの大輪田橋親柱、50 年後の兵庫県南部地震で倒壊

平成7(1995)年1月17日に発生した兵庫県南部地震では、橋の四隅にあった親柱4本すべてが倒壊しました。その内1本は運河に沈んだまま、もう1本は元の位置に復旧(写真-10)、残る2本は復旧した親柱の傍らや薬仙寺にモニュメントとしてよみがえっています。



写真-9 薬仙寺

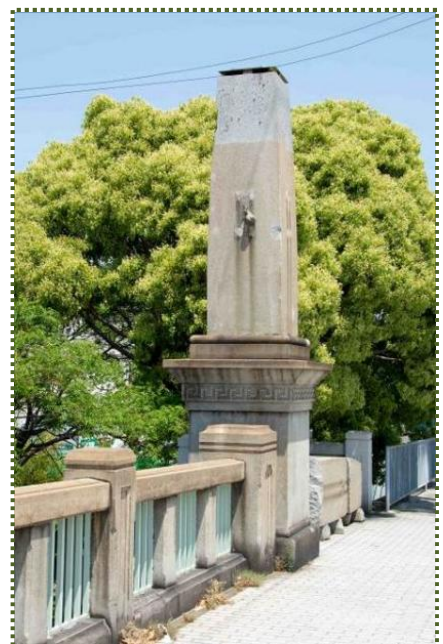


写真-10 復旧された大輪田橋の親柱
(親柱の向うにもう1本の親柱が横たわっている)



図-1 大輪田橋周辺の地図

写真-11 は、平成 10 (1998) 年に大輪田橋東端の親柱横に設置されたモニュメントです。地震で倒れて真っ二つに割れた親柱の上面には、神戸市の手で「大輪田橋 戦災・震災復興モニュメント」の銘板が埋め込まれています。



写真-11 親柱上面に埋め込まれた銘板

大輪田橋 戦災・震災復旧モニュメント

平清盛公ゆかりの地名にちなむこの大輪田橋は、1924年の竣工以来、二度の大きな災害に遭っています。1945年3月17日の神戸大空襲では、水を求め、この橋に避難した多数の市民が炎にまかれ犠牲になりました。橋にはその時の炎で黒く焼け焦げた跡が、今も残っています。そして50年後の1995年1月17日の阪神・淡路大震災により、この橋自体の親柱が崩れ落ちる被害を受けました。

ここに、戦災と震災を経験した「生き証人」でもある親柱をモニュメントとして再構成し、その時節の冬の星座をかたどった照明によって、私たちの記憶に永くとどめるとともに、鎮魂の意を示すものです。



写真-12 大輪田橋 戦災・震災復旧モニュメント

下の写真-13・14は、大輪田橋近くの大輪田橋に設けられたモニュメントです。倒壊した親柱や高欄の一部は瓦礫（がれき）として処分されそうになりましたが、愛着を持つ住民らの要望で境内に保存することになったそうです。



写真-13 高欄の破片でつくった戦災・震災モニュメント（大輪田橋）



写真-14 大輪田橋 戦災・震災復旧モニュメント（大輪田橋）

■ モノローグ

大輪田橋の東の袂から東へ約 200m のところに「兵庫県立兵庫津（ひょうごのつ）ミュージアム」があります。この建物は、県政 150 周年事業の一環として、兵庫県の発祥地である兵庫津に初代県庁の建屋（旧大坂町奉行所兵庫勤番所の建物）を復元し、近代以前の神戸港の成り立ちや、兵庫県内の歴史や文化、産業などが学べる展示施設として整備されたもので、「初代県庁館」と「ひょうごはじまり館」の2施設からなります。



写真-15 兵庫津ミュージアム



写真-16 初代県庁館正面入口の長屋門



写真-17 初代知事・伊藤俊輔の執務室（奥）と前庭

初代県庁が置かれた“始まりの地”に、令和3(2021)年11月3日「初代県庁館」が開館、翌令和4(2022)年11月24日「ひょうごはじまり館」が開館しました。筆者も令和5(2023)年1月に行ってきましたが、「ひょうごはじまり館」は結構見ごたえがありました。入館料300円です。

「震災モニュメント」といえば、今年は関東大震災から100年目に当たります。大正12(1923)年9月1日11時58分に発生した関東大地震によって南関東および隣接地に大きな被害をもたらした地震災害です。死者・行方不明者は推定10万5千人で、明治以降のわが国の地震被害としては最大規模です。

この関東大震災に因んで毎年9月1日は「防災の日」。広く国民が台風、高潮、津波、地震等の災害についての認識を深め、これに対処する心構えを準備するために制定された防災啓発デーです。

ナツズイセン（夏水仙）

ヒガンバナ科ヒガンバナ属の多年草。和名は、葉がスイセンに似ていて、花が夏に咲くことに由来するが、植物学上はスイセンではなくヒガンバナの仲間である。ただ、ヒガンバナは花を咲かせて花が枯れた後に葉が伸びるのに対し、ナツズイセンは春に葉を出して葉が枯れた後に花が咲く。また、花期に葉がないことから、俗にハダカユリ（裸百合）とも呼ばれる。地下に鱗茎を持ち、秋から翌年の春にかけてスイセンに似た葉を出す。リコリンを含む有毒植物である。戦災殉難者慰霊碑近くに咲いていた（写真-18）。なお、花にとまっているハエは本物です!!



写真-18 ナツズイセン

【参考資料】

- 1 『兵庫県の近代化遺産』 兵庫県教育委員会 平成18年3月
- 2 『兵庫運河：大輪田橋とキャナルプロムナード』 山陽沿線ブログ 令和3年1月
<https://www.blog-sanyo-railway.com/sanyo-005/2021/01/15/>
- 3 『ルネサンス時代の絵画になぜハエが描かれているのか？』 エピネシス 平成29年9月
<https://epinesis.net/archives/72106354.html>
- 4 『雷紋、関東大震災、ナツズイセン』 フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』
- 5 『兵庫県立兵庫津ミュージアムについて』 兵庫津ミュージアムHP
<https://hyogo-no-tsu.jp/about/>

※発刊：令和5(2023)年5月 『ひょうご水百景』No.173

改訂：令和8(2026)年7月 『ひょうご水百景』No.173